夫には
絶対言えない
秘密の夫婦生活

平凡な主婦の秘密の愛の物語

本木　薫

プロローグ

彼女は夫と二人で過ごす毎日には
いつからか何も感じなくなっていた。

それは平和なのだろうか、それとも不毛なのだろうか。
迷いの中で淡々と過ぎていく日々。

そんな退屈で平凡な日常がある日突然激しく動き出した。

何気ない日常をまだ知らない明日へと導いたもの。
それは夫は知らないもう一つの家庭だった。

夫が出勤している平日の午後、彼女に与えられた秘密の場所。
いつ終わりが訪れるのかも分からない不確かな世界。

それでもそこには確かに生きている実感はあった。

二つの家庭をもつ平凡な主婦のダブルライフ物語。

早朝

いつもと変わりない朝の始まりだった。カーテンを開けると、温かな太陽の光が部屋を包み込む。明け方近くまで降り続いた雨はすっかり止み、窓の外に見える風景はいつもより鮮やかな色合いを醸し出しているように感じられる。テレビの横にあるサイドボードの上に置かれたデジタル時計が、７時２０分を示していた。いつもと変わりない時刻。この部屋でカーテンを開け、窓から外の景色を見る時刻はいつも正確に計ったように同じだった。決して狂う事のない生活リズムが、私の平凡な毎日の生活を支配している。

キッチンで、朝食の準備に取り掛かり始めると、あっという間に１０分が過ぎる。私は、時計が７時３０分を示しているのを確認すると、寝室の扉の方に顔を向けた。 「パパ、瞳、起きなさい。７時３０分よ」 ２ＬＤＫのアパート。キッチンから叫ぶモーニングコールは、６畳の寝室で眠る克典と瞳には目覚まし時計の役割を果たしていた。だから、寝室に置かれたセミダブルのベッドの上で寄り添うように眠る父娘の枕元には、目覚まし時計は置かれてはいない。そして今朝も、いつものように５歳になる瞳が私のモーニングコールで目を覚まし、隣に眠る父親の克典を起こしているはずなのだった。

私はキッチンで朝食の最後の仕上げにオムレツを焼く。最近、絶妙の半熟にできるようになり、克典に感心されたオムレツだった。すでに食卓には、生野菜のサラダとグレープフルーツを乗せた皿がそれぞれ３人分並べられていた。 「ママ、おはよう」 幼稚園の制服を着た瞳が小走りに私の元へと駆け寄ってくる。 「おはよう」 そう言いながら、瞳を避けるように半熟オムレツの焼き上がったフライパンを抱え、食卓に置かれた皿へと盛りつけてゆく。 「祐希、おはよう」 着替えを済ませた克典もやって来て、私達は朝の食卓を囲むように座った。

一体いつからだったのだろう。このありふれた何処にでもあるような平凡な朝が始まったのは。このささやかな幸せをもたらしてくれる朝のひとときを過ごせるようになったのは。・・・本当は平凡でも幸せでもないのかも知れない。それらは全て偽りと虚構に満ちた朝の風景であり、私は一瞬の幻想に浸り、快楽にも似た高揚を覚えているだけなのかも知れなかった。

だから、この朝が一体いつから始まったのか、精神を貫く快楽はその時間的長さをもはや忘却し、もう遥か遠い昔から当たり前のように行われているような錯覚さえ抱いてしまう事もある。
・・・真実は一つしかないのに。

私は、玄関で克典にお弁当を手渡し、二人を見送ると、そのままベランダへと移動して、今度はアパートの前の道を駅へと向かって歩いて行く二人にもう一度「行ってらっしゃい」を言う。
アパートの部屋は二階にある為、手を繋ぎながら歩く二人はベランダを見上げ、いつも笑顔で手を振ってくる。そんな二人の姿が十字路の彼方に消えて見えなくなるまで私はベランダに立って

いるのだった。

克典は瞳を幼稚園へと送ってから、彼の勤める美容院へと電車で向かう。彼が勤務する美容院はアパートから３駅目の場所にある為、おそらく店に着くのはいつも９時頃に違いない。
部屋に入ると時計は８時３０分過ぎを示していた。食卓に並んだ皿をキッチンへと運び、朝の炊事、洗濯、掃除が始まる。
五月の太陽に向けて、三人分の洗濯物を干し終えた頃、時計は１０時過ぎを示していた。正確なリズムで刻まれた時刻。私は身支度を整えると、アパートの部屋を後にした。

午前

階段を降りた隅の駐輪スペースに置かれた自転車に乗り、走り出して行く。路面のアスファルトは、明け方近くまで降った雨のせいで所々窪みに水たまりを残しつつ、濡れた表面が空から照りつける太陽の光を鮮やかに反射していた。

雨上がりの朝の空気は澄みきったように透明感をもって空へと流れ、心地良い。さらに五月という季節が肌に清々しい風を吹き込んでくる。自転車で駆け抜ける速度と同じ速さで肌に触れてくる風は胸の奥深くまで爽やかにさせてくれるのだった。

こんな朝が始まったのも今と同じ五月、爽やかな風が胸の奥深く吹き抜けた季節だった。心を研ぎ澄まし、時間軸を正確に辿るならば、ちょうど今から三年前の事だった。

自転車の車輪が濡れたアスファルトをなぞり始めてから１５分が過ぎた頃、私は目的地であるいつもの場所へと到着した。

閑静な住宅街の中に佇む煉瓦造りの一軒の家。入口の表札には「Ｎ間」と彫られてある。そして門扉の横の駐車スペースには黒のセダンと赤のコンバーチブルタイプの車が２台止めてある。この朝が始まる昔から知っている場所。

門扉を開け中に入ると、自転車を赤い車の隣に置き、私は玄関へと向かった。　鞄からキーケースを取り出し、一番大きな鍵を玄関の鍵穴へと差し込んだ。

リビングの壁に掛けられた時計は１０時３０分近くを示していた。　キッチンにはコーヒーカップが二つ、流し台に積まれたまま置いてある。

私はそれを洗い終えると、洗面所に行き衣類が入ったままの洗濯機の電源を入れ、洗濯液を流し込み、洗濯を始める。

続いて、リビング、ダイニング、キッチン、廊下の順に掃除機を掛けてゆく。部屋の掃除を終える頃には洗面所で作動していた洗濯機が動きを止め、終了音を鳴らしている。

芝生の庭に出ると、物干し竿は今朝方まで降った雨のせいで濡れ、水滴を滴らせていた。それらを拭い取ってから僅かな洗濯物を五月の太陽へと向けて干してゆく。二度目に見る太陽は、一度目の時よりも空高く陽光を降り注いでいた。

午後

１２時３０分。壁に掛けられた時計が示している。
門扉を開け、再び自転車で乾き始めたアスファルトの上を駆け抜けて行く。

閑静な住宅街の中、真昼の時間帯に自転車を走らせているのは、いつも私だけだった。行き交う歩行者は誰もがゆくっりとしたスピードで、優雅にこの街を過ぎて行く。

それは忙しなく流れる私の日常とはきっと対極にあるだろう人生を歩んでいるからに違いなかった。
いや、皆、日々追われるような生活を過ごしているのかも知れない。
ただ、それは私が辿る日常とは本質的に異なり、単一直線上に連なる幾つもの出来事を越えるもの。

私の日常にはいつだって、決して交差することのない二本の平行線が引かれている・・・。

自転車を走らせながら腕時計に目を向けると１２時５０分になっていた。幼稚園の正門の辺りで瞳は幼稚園の女の先生と二人で話ながら、私のやって来るのを待っていた。今日は少し遅れてしまったようだ。

「ゴメンネ」そう言い、自転車を二人の前で止めると、瞳は、「ママ遅いヨ」と少しふてくされた様子で自転車の後ろの座席へと乗り込んでくる。
「瞳ちゃん、さようなら」 優しい笑顔で手を振る先生に向かい、 「バイバイ」 と瞳も力強く手を振り返し、私も会釈を交わすと瞳の体重分だけ重くなった自転車を再び来た道へと漕ぎ始めた。

瞳を乗せて辿る帰り道は緩やかな登り坂になっており、自転車のペダルを漕ぐ足には来る時の倍程の負担がかかった。
それでも、瞳が幼稚園に入園してからおよそ一年の間、雨の日を除いて自転車での迎えを欠いたことは一度もなかった。

例え歩いたとしてもアパートまでは幼い瞳でさえ２０分とかからない距離ではあったが、私は毎日この緩やかな登り坂を瞳を乗せながら力一杯自転車を漕ぎ続けている。漕ぎ続けなければならなかった。この朝が始まったあの日からずっと、私達に絡みつく呪縛の為に・・・。

昼下がり

アパートの部屋に着いたのはいつもより少し遅い午後１時前だった。
玄関の扉を開けると、瞳は小走りに部屋の中へと駆け入りテレビのスイッチを入れる。

いつ頃からか、私がキッチンで昼食の準備をしている時に点いていたテレビを見ていた瞳は、すっかり真昼のメロドラマにはまってしまっていた。

瞳ほどの歳の子にメロドラマの描く大人の男女の濃厚なラブストーリーが理解できるのか、テレビの前で、まるでアニメを見るかのような姿勢で釘付けになっている彼女の姿を見る度につくづく不思議でならなかった。

一体そこに描かれている何が幼い彼女をこんなにも惹き付けているのだろう。そんな思いは、時として、私の中に一抹の冷たく凍る不安を投げかけてくる。

もしかして、彼女は私達の関係を知っているのだろうか。そんなはずはない、そう自分に強く言い聞かせながら、キッチンで昼食のパスタを茹でていた。

真昼の太陽は緩やかに上方から西へと傾き始め、アパートの部屋のキッチン辺りまで陽をもたらしていた。ベランダに出ると、太陽が東の空低くにある頃干した洗濯物は、五月の風に晒され、新鮮な香りを漂わせている。

一日も半分が終わる頃の時間。一番外側に干してある克典の下着から順番に洗濯バサミを外し、三人分の衣類を取り込み終えて部屋に入ると、サイドボードの上の時計はすでに午後４時３０分を示していた。それは何気ない日常の第二幕の始まりを告げる時刻だった。

瞳はアニメの再放送を見ている。「瞳、ママお仕事に行ってくるわね」　夕方はアニメに釘付けの瞳は、「ハーイ」と言ったまま、いつもテレビから視線をそらす事はない。第二幕はこうして穏やかに開いてゆく。

夕暮れ

アパートから今日二度目の自転車での出発を果たした私は、近所のスーパーへと向かった。　夕方のスーパーは、夕食の材料を買いに来る主婦達で混んでいる事が多い。籠をカートに乗せて人の合間を縫うように、食材探しを始める。この瞬間が私はなぜか好きだった。

自分が何処にでもいる普通の主婦であるのだと、周りで同じように食材探しに勤しむ彼女達の姿に同化しながら、感じる事ができるからだ。勿論、それが錯覚であることは良く分かっていた。

最後の野菜コーナーを過ぎた頃には、カートに乗せられた籠の中身は溢れる位一杯になっていた。私はレジ脇に置かれた花のコーナーから綺麗に束ねられたピンクの花を一つ取り、食料品で膨れた籠の上にそっと乗せた。

レジで精算を済ませると、持ってきた赤と青の布製の買い物袋を広げ、籠の中身を確かめながらそれぞれの袋に振り分けて入れてゆく。そして最後に赤い袋の上にピンクの花束を入れた。

スーパーの外は、空がかなり薄暗くなり始め、自転車の籠に赤と青の買い物袋を乗せると、夕暮れの街へと私は再び走り出した。

通い慣れた道。並木道を抜け、交差点を曲がると、大きな池を中心に据えた公園が横に広がる。さらに、その公園前に伸びる道を曲がると、そこはもういつもの閑静な住宅街だった。

いつの日だったか私が見つけた道。何気ない日常生活を繋げてくれる道。そして、私の人生そのものを遠くまで導いてくれるはずの道。夕暮れの燃えるような陽が、今その道を紅く染めるように照らし出している。

煉瓦造りの家の前で自転車を降りると、門扉を開け中へと入った。自転車は朝と同じように赤い車の脇に着けておき、籠から青い袋だけ取り出し、玄関へと急いだ。

リビングに入ると、壁に掛かった時計は午後５時半を示していた。　庭に干されたままの洗濯物を取り込むと、私は、キッチンで青い袋に詰め込まれた食材を取り出し、冷蔵庫に保存する物と調理に使う物に分けた後、料理に取り掛かった。

ここのキッチンは広く、どんな手の込んだ料理を作るにも適していたが、私は未だこの場所でそのような料理を作った事はなかった。そのため、システムキッチンの上はいつも生活感なく綺麗な状態を保っている。

スーパーで買った食材を使い、簡単な炒め物を作ると、それを手早く皿に盛りつけ、それをラップで包んで冷蔵庫に直した。続いて、一合分の米を研ぎ、炊飯器のスイッチを入れると、私は急いで部屋を後にした。

アパートに戻ると、部屋の中はレースのカーテン越しに街灯の薄明かりが差込み、瞳は中央に置かれた二人掛けソファの上で眠っていた。サイドボードの上のデジタル時計が、暗がりの中に緑の蛍光色を放ち、午後６時３０分を示している。